

民俗博物館だより

Vol. II No. 4

1976. 2 . 10



展示室（茶業コーナー）

目 次

地方博物館を考える（その2）	1
丸薬製法の変遷（フィールドノート）	3
トンド（奈良県の民俗行事）	5
大和まじない資料(1)	6
博物館事業報告	8
寄贈民俗資料分類目録（Ⅱ）	11
大和の民家	17
薬の利用（収蔵資料の紹介）	19
体験学習講座・民俗講座・おしらせ	21

地方博物館を考える

(その2)

博物館活動を振り返って

年のはじめにはやはり何か新鮮さを感じるものである。当館も開館以来2度目の正月を迎えたのであるが、現在までの活動を今ふりかえって見るのも良い事であろう。まだ1年程度の開館実績で当館の活動を云々するのは時期尚早といえるが、軌道修正を加えるべき点があれば少しでも早い時期に発見しておいた方がよいであろう。常に理想的な地方博物館とはどの様なものであるべきかという事を考え、それに照らして当館の現状なり進むべき方向を適確に把握する努力は続けていなければならない。緻密な分析は今後待つとして、前回までに御寄稿いただいた斯道の先輩方の御意見をよりどころに、今回はゆめうつつのまま考えてみたいと思う。

○資料面から見た活動

資料収集・整理保存・調査研究・教育普及といずれの活動も博物館の機能として独立したものではなく、資料と切りはなしては考えられないが、一応資料の取り扱いという面から活動の跡を見てみよう。

当館に収蔵されている民俗資料(主に民具)は、昭和45年11月市町村長懇談会での奥田知事の提唱により、昭和46年10月から県下一斉に収集が開始された。そして、48年11月まで当時の民俗公園建設室の中心的業務として全力を傾けて収集された。この間の収集民俗資料点数は7463点(49年11月時点)であった(ちなみに現在は8291点となっている)。

この収集の方法は各市町村内に民間1名、市町村職員1名の割で計2名を民俗調査員として委託した間接的手段によって県下一斉に調査と収集が推進された(部分的には県調査と称して建設室の職員も調査収集に参加した)。そして、短期間のうちに県下全域から、大変多くの資料を収集することができ、開館直前になって収蔵資料をあわせて探さなくてもすんだし、またくらしの文化財としての民俗資料(民具)の価値と認識を定着させる事にも成功したといえる。そしてまた資料の無償提供に協力された多くの県民の厚意を、民俗博物館ならびに民俗公園の建設という具体的な形に結びつけることができ、県民に親しまれるべき施設としての素地を作る事もできた。

しかし一方、こうした県民の意識の盛り上がりと共に寄贈民俗資料の数も加速度的に増加していった結果、当然の事ながら博物館資料として必要な収集段階での緻密な調査などはこれに追いつかなくなったのであるが、もとより短期間に収集可能なものの全てを集めて保存への

足がかりとし、あわせてより多くの県民に効果的に民俗資料に対する理解と認識を普及するのを目的とした、その手段としてこうした収集方法を行ったのであるから、緻密な調査研究とは両立しない事として割りかねばならなかったのである。

この点については大島曉雄氏も一般論として指適されたところである。「体系的収集に対する実に大きな問題の一つは、各地の博物館の多くが資料収集の大部分を寄贈という手段に頼っていることであろう。このことは、地域住民との連繋や現今の異常な古民具ブームによる民俗資料の売買に博物館が無意識に荷担することがないなどの大きなメリットを持つ反面、博物館の立場に立った独自の効率的な調査収集活動を困難なものにしている原因の一つと考えられる。」(『奈良県立民俗博物館だより』Vol. II No.2,「郷土博物館における民俗資料の収集について」)。ここで述べられている体系的収集とは「無目的な収集に対応して用いられる概念で、ある一定の作業体系なり目的に応じた基本的な民具を収集することである。即ち収集に当っては収集可能なものの全てを無批判に集めるということではなく、博物館からの一定の選択行為が必要であり、現実に遺品がなければ復元製作による収集も考えねばならない。」(同上)という事である。

この問題について当館ではどの様に対応していたかふりかえてみると、昭和48年4月、民俗博物館展示の基本計画作成に関連して、オープン展示に必要な資料選定という作業の中ですでに現実的な課題として認識されていた。展示という一定のテーマにもとづいて資料に関する調査研究が必要になり、先に大量に収集されていた資料を基盤として必要なものを抽出すると同時に、それらに関する再調査と不足している資料の収集・調査を実施することになった。この場合の調査収集は展示のためにという極めてさしせまった状況からの出発であったけれども、当館にとっては体系的な資料収集の最初のものとなったわけである。そして実物の収集が不可能なものについては復元製作を行なったものもいくつかあり、結局資料不足のためにテーマを変える事なく展示する事ができた。この時はあくまでも当面のオープン展示の為の資料収集と調査であって、県立民俗博物館としての資料大系的見地からすれば消極的な姿勢であるともいえるが、それぞれのテーマ(県内を代表する生業として稲作・林業・茶業)については調査研究の成果といえるものになっていると思う。もちろん今後も継続して調査の内容は充実して行かねばならぬのは当然であるが……。

この展示テーマを中心とした調査収集をもっと積極的に行なう事はできないかという事で、開館以後はじめての

特別テーマ展（オープン展で扱わなかったテーマによる展示）「大和の薬と行商」では、この機会に企画と関係する資料の調査内容を充実し、資料の整理をも兼ねて、少しずつでも博物館資料として完全なものへ持って行こうと考えたわけである。

この展示では、奈良県内の薬業と売薬行商に関する調査資料が充実したと共に、未収集の関係資料を数多く借用できた事でその所在を明らかにすることもできた。また借用した資料の中には、そのまま寄贈または寄託いただいたものも数多く、収蔵資料面での充実にも著しいものがあつた。当館の総資料点数からすればわずかではあるが確実に整理できる見込みであり博物館資料としての価値を高める事ができたと思う。また借用した資料についてもその所在地と共に当館の写真資料として残す事ができた。

理想をいえば、全収蔵資料を集中的に再調査できれば良いのであるが、博物館の機能はそれだけではなく、常に展示で代表される教育普及活動を一方で行なわねばならない。そしてこの展示は博物館の調査研究の成果であらねばならぬという博物館の本質に照らしてみた場合、一般利用者と博物館が接する部分を開店休業状態にするような方向には進めないのである。

この次は「水と生活」というテーマで展示企画を持っているが、この機会に展示に関係する収蔵資料の整理に着手すると共に、調査によって奈良県内に見られる水と生活に関するくらしの変遷というものの概観をつかみ、民具を媒体とした展示というコミュニケーション手段によって、人々に民具が語りかける何かを感じ取ってもらいたいと考えている。

しかしながらこのやり方は、我々にとっては大変荷が重たいといわねばならない。それは多く見ても1年程度の期間で調査・研究・展示へと展開させるのであるから常に全力投球という事になり、展示そのものが一定の型にはまった単調で魅力のないものになってしまう危険がある。たまたま「大和の薬と行商」の時は、民俗公園建設室の職員の苦心によって製丸師の作業場の実物大の模型を作る事ができたが、我々5名の力だけではとうてい実現できない事であった。入館者にとって創造性豊かな展示でありたいという我々の願いとは矛盾するところであるが目前の多忙さに没して我々の創造力が低下している事は認めざるを得ない。要は充分な量の調査研究資料の蓄積があれば良いのだが、1日も早くこの条件が達成できるよう充分な資料の蓄積に努めると共に、効果的な方策を見つねねばならない。

次回は、教育普及活動の面からふりかえてみたいと思う。

（大宮守人）

小学生が見た博物館展示

1

博物館の展示場には、不特定層の見学者がおとずれることはいうまでもない。このことは、博物館の展示を企画するものにとって苦慮することであり、しばしば問題としてとり上げられることでもある。

既存の展示物に対して、見学者はどれだけ理解し、認識しているか、それを正して把握しないかぎりこの問題解決の糸口はえられない。

そこで、そのころみとして、団体見学のある小学校5年生の感想文を披見し、分析することにした。

2

ここに引用するものは、A小学校5年生1クラスのものである。A小学校は、近鉄奈良線沿線の住宅地にあり、県下でも教育熱心な学校として有名である。

A校の見学の希望をうけた当館では、従来からの学校見学の受け入れの要領をA校にもお願いした。この要領を記すと以下になる。

①付き添い教員の事前見学

②『博物館利用の手びき』（館で作成）の配布

③担当教員によるH・R等での事前授業

（注：②の手びきは、各展示コーナーの概観を解説したもので、見学希望の教育機関の指導者に配布する。）

A校も以上の方法を実施していただいたので、見学した生徒達は、事前に展示物の予備知識となんらかの博物館のイメージをもって入館したといえよう。



校外学習としての博物館利用

第一印象の感想を小学生の大多数は、「今とむかしは差がありすぎる」と表現し、その違和感を「人ときかいのちがいだ」という象徴的なことばで述べている。

また、展示している諸道具がほとんど「手でつくられている」ことをみつけ、その工夫されていることに対して、「昔の人は智慧があつた」また「今のような機械やったら（かんたん）にできたかもしれないけれど、むかしの人がよくできたなあ」とむかしのひとの知恵に感心し、「長い年月をかけていろいろ便利に考えたのだろう」「む

かしの人の考えた道具は今に比べてのう率は悪いが、人ができるだけのう率よくしょうという考えがこめられていると思いました」ともの（展示資料）からうけた実感を述べている。上述の引用からも感じられるが、「今の機械もむかしのこの道具がなくてはいまのすすんだものはなされなかった」と過去と現在の比較を同時点におき、時間的推移を無視した分析（見学者がおちいりやすい錯覚）をせず、正しく歴史的変遷を把握している。

まだまだ、子供達の現在のおかれている境遇とむかしとの比較はつづく。「むかしの人はだれも今みたいになんてはしなかったということです」また、「生活にひつようない物はあまりかわないということがむかしの人のいいところだと思いました」と戦後の消費生活が反省されてきた今日の世相を敏感に受けとり、自戒している。

いろいろな感想を述べているが、どの子供にも共通していることはむかしの人々のくらしのイメージをむだのない、精一杯のものと受けとめていることである。それは、農具などの仕事用具から受けたものである。若干ではあるが「しこう」「儀礼」のコーナーには、人々の楽しみの時間の用具を陳列しているが、それについては、ほとんど語ることがない。そのうちでも、ただひとつ儀礼コーナーの陳列品の膳について「どうしてああいう（黒い）色にするのか」と疑問をもっているが、おそらく暗いイメージを持ったものと思う。儀礼用具等から、農具等をみる眼とちがった観点の感想が出ることを予想したが、残

念ながら記述されていない。子供達には、農具と膳はどちらもむずびつかないようである。それらを同じ人が使用したとは考えられないということであろう。むかしのくらしには、日常のつましいくらしのなかに、晴の日もときよりあったことを今後の展示で、もっと表現していかなければならないと思った。

他にも現在のくらしとの比較はなされている。「今はべりすぎて人間がいなくてもいいようだ。むかしのせいかつをしてみたくなった」という現在よくいわれている人間疎外感、また、「今はこうがいやらでたいへんだけど、むかしなら（それがなくて）いいなあ」という公害からの逃避感など、現在社会の諸問題のなかった過去のくらしへあこがれを持っているが、結論は、「そういう（むかしのくらし）のはいつまでもならこまってしまう」と（今の生活上の欠点を認識しながらも）現在のくらしの方に軍配をあげている。

以上が、A校5年生1クラスの展示への感想だが、私どもが予想していた以上に、複雑な思考をし、彼らなりに、確固とした認識をもっている。

しかし、むかしのくらしを時間（歴史的変遷）と空間（生活の内容）ということで考えるならば、子供達の後者への理解は充分といえないであろう。展示する側としては、今後も特別テーマ展等で過去の生活内容を具体的にあらわしていかなければならないと思う。

（芳井敬郎）

丸薬製法の変遷

—フィールドノート—

特別展示で「大和の薬と行商」というテーマをあつかい、その折、調査研究したなかのノートのうちから今回、丸薬製造について述べることにする。

丸薬は、何種類かの原料を調合し、丸めたものであるが、その製法技術にはおもしろい変遷がある。本論ではもの（用具）と技術のかかわりあいについて考察し、人間の知恵の歴史の一端を述べるつもりである。

前号でも発表（「近世以前の薬」）されたとおり、江戸期以前の文献にも丸薬は出てくるが、その製造法についての記述は、ほとんどない。

しかし、江戸幕末期までの方法を、おおよそ推測することはできる。古老のはなしや調査報告によって考えれば、おそらく「手もみ法」が広くつかわれていたといえよう。

残念ながら、奈良県の古老からその法の詳細を聞くことができなかったので、越後の毒消丸の手もみ法を紹介することにする。「木で作った鉢に薬材を入れ、手でよくまぜ、水でほどよい固さにこね、両手で生ウドン状の

大きさにする。次に右手の親指と人差指でこれを持ち左手の指先でちぎって、右手の掌に三個おき、人差指、中高指、薬指の三本の指先で一度に三個をまるめるが、器用な人は一時に四個または五個まるめた」（『越後の毒消し』昭和39年刊小林著より）そうであるから、両手の作業であった。

次に越後では、手もみ法から明治27年頃、製丸器が導入されることになる。富山の製薬業者の道具を視察してまねるのであるが、この手動式製丸器は、明治初年に富山で線香を作る道具から考察したというのが定説となっている。

今日この道具を富山市立郷土博物館等で見ることができし、富山県の製薬業者でも使用されている。

その製丸器の使用法は、まず、こねた原料を梘（真ちゅう箱の底面に一列に穴があいている）に入れ、器械の中ほどにセットする。それを押し棒で圧迫すると、梘の穴から、円筒状のくすりの半製品がでてくる。それを丸じ板（板に布をはったもの・製丸板）の上に、庖丁でと

ってもう一枚の丸じ板でまるめる。この作業はなかなか熟練をようし、専門の製丸師がおこなったそうである。

大和でも手動式製丸器は使用せられ、その用具の型や作業内容は、若干異なるがほぼ同じである。

手動式のものが、今日では、電動式に変っているが、極小もの、数量の少ない場合は、使用されることがある。

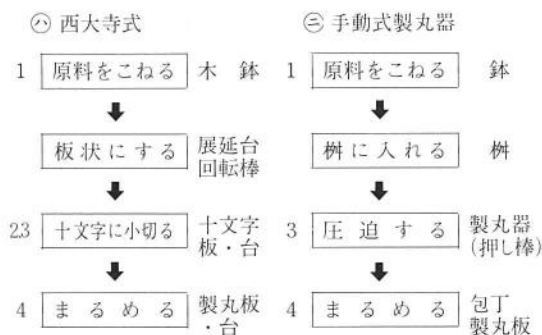
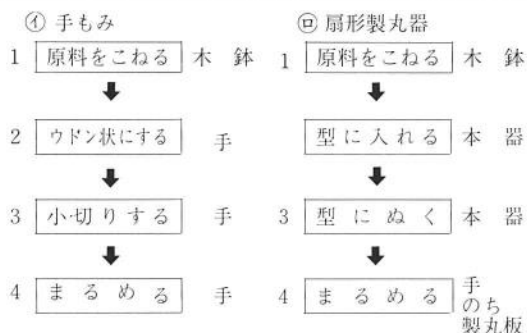
さて、手もみから明治期に手動式器械に移行したのが、越後や大和の状態であったといえるが、その間、余り普及しなかった道具や技術ものこっている。

富山でつくられた、扇形製丸器があげられる。言いつたえでは、幕末期に考えられたといわれている。その使用法は、まず、扇の骨のような金属棒（3本組の場合は、両端の棒は内側だけ、まん中の棒には、2方、1列に半円筒の穴があいている）を台にセットする。つぎに、その穴に原料をおし込み、その棒を台からはずして、開くと、円筒状の半製品ができる。それをまるめるのである。しかし、大和では、この道具は普及しなかったのか残っていない。手もみにくらべ、形はそろうが、能率のよいものでないで全国に行きわたらなかったのだろう。

また、奈良の西大寺豊心丹製造方法もこの寺の独特のものである。豊心丹は、鎌倉時代、当寺の中興の祖、叡尊が創製したといういつたえのある薬で、日本の施薬売薬としては古い歴史を有している。また、「西大寺の豊心丹買わんものはアンボンタン」といわれるぐらい江戸時代の南部旅行者の土産物となっていたらしい。この丸薬道具（おそらく江戸後期のもの）は現在完全に蔵されているが、昭和18年の製薬企業合同を最後につかわれなくなった。また、この道具を使用した執事氏も死亡され、仕法は、以前撮影された写真より憶測するよりしかたない。糊とまぜた原料を回転棒でのぼし、それを細かいミゾの入った板で、十文字で圧迫して、細かい四角形に切りきざむ。それを製丸台の上にならべ、上板でゆるく回転して丸剤とする。（薬事日報・昭和31年10月6日刊『豊心丹の製薬装置』より）

前述したとおり、製丸法として4方法をあげたが、その作業の工程を図式化すると以下のようになる。

手もみ方法を規準にして、その作業の似かよったものに同じ番号をつけてみた。

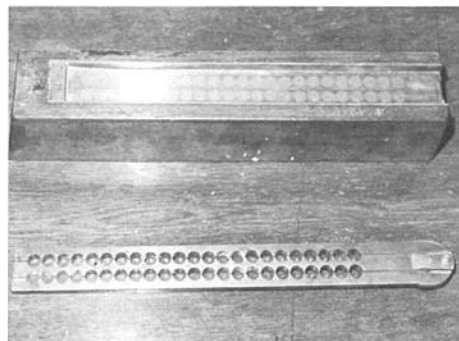


1の作業は、どれでも手でおこない用具は考案されていない。2の作業は、⑥では型でおこない3の作業と同時にするようになっている。⑤⑦の場合は、2とちがった作業をおこない、3にいつている。4の作業は、⑤⑥⑦とも、製丸板でおこなっている。

ようするに④から⑦の変遷を考えると、能率を上げるために道具がいろいろ考案されたといえよう。④では1度に多くても4個だが、⑦では、約1,500個の丸剤ができ上がるようになったのである。また、粒のそろうものになった。

紙数の都合上、作業内容の記述に不明な点が多いと思うが、余り述べられることがない電力機械導入以前の技術史解明を丸薬製造をつうじておこなったつもりである。

(芳井敬郎)



扇形製丸器
(富山・広貫堂蔵)



トンド

— 奈良県の民俗行事 —

(6)

民間で行なわれる正月行事には、盆の行事に匹敵するほど、沢山の内容が含まれている。正月行事とは年の暮のコト始めからはじまり松の内までの間に行なわれる行事である。この期間には各村々や家ごとに、昔から伝承されてきた様々な行事が今なお残されているようだ。今回はそうした正月行事の中から、トンドを中心とした関連の行事を取りあげてみることにする。

奈良県では各村ごとに、十四日の宵か十五日の早朝に焚く火をトンドあるいは濁ってドンドと言っている。焚く場所はその村の垣内ごとに、2・3ヶ所に別れてするところが多い。また多くは毎年焚く場所も定まっているようで、そこをトンド場と呼んでいる。吉野川附近の村では吉野川の川原がそうだし、奈良盆地や大和高原では田圃の中や、池の縁や、辻の広場などがトンド場と呼ばれているところである。そういう場所へ子供が中心になってトンドに必要なものを集めてくる。竹や木や藁や縄など一軒ずつ集めに歩き、その時同時に、シメ縄や門松などの正月のカダリモノをも集めてくる。竹や木の無い村では、遠方まで切りにゆくそうである。集められたものは、大人に手伝ってもらって、中心に竹（笹のついたもの）を立て、その周囲に藁をのせてゆき、そしてその外側を縄でぐるぐる巻きにしてゆく。竹は高ければ高いほど良いというそう。最初の焚きつける場所を、藁で作ったシメ縄型のマエダレというものを張る村もある（菟田野町）。

夕刻近くになると、村の長老がその年の明の方から火を入れるそうで、この火をマメ木でするところもある。その頃になると村の人が集まり、トンドの火で古くなった祠や古い御札をもやす。またトンドの火で餅を焼き、その餅を食べると歯痛にならぬとか、腹痛にならぬとか言う。焼いた餅を小さくちぎってトンドの火の中へ投げ入れ「ブトの口焼く・ハミの口焼く・ノミの口焼く」などと唱えているとその年の夏は虫にさされぬという俗信がある。書き初めの習字もトンドの炎にのって高く上られ

ば手があがる（上手になる）と言うのも広く信じられている。トンドの脇で小さなトンドをする村もあり、それをコジキ火と言って、その年に仏を出した家の人が、トンドに混じわらず自分だけの家のトンドをするのだそう（大和郡山市）。各村でトンドに関する行事に少しずつ異なる伝承を持つが、だいたい上に書いたようなトンドが多いようである。

トンドの後に残った灰は大切にあって来て、翌日の十五日に田や畑に「ホーイ、ホーイ」と声をかけながら播くこともあるし、家のまわりに灰を播いておくとヘビが入らないとも言う。また、竹のもえさを味噌部屋に立てかけておくとヘビが入らぬといって、魔除けにするとところもある。トンドの火も大切に、竹の焼けさしやロウソクにつけてもって帰り十五日の小豆粥の種火につかう。この小豆粥にまつわる伝承も多く、その内容もなかなか豊富である。小豆粥を食べる時、茅の簀で2・3口食べてそれをなおしておき、稲播きの時に水口にツツジなどとともに茅の簀を立てたり、またその小豆粥を、カシやビワの葉を皿がわりに使って、柿や桃などの成り木に、ナタで傷をつけて供えたりする。両者とも豊作祈願の意味が込められているのであろう。トンドに関して実に様々な事項が伝承されているのである。村人にとってそれほどトンドとのかかわりが深かったということであろう。

ところでトンドをしない村もある。たとえば桜井市北白石では、トンドをしたら縄がクチナ（ヘビ）になったので止めたというし、また榛原町の初生では雷が落ちるからしないというところもある。こういう意味はあとで考え出した説明であろうが、本当はどうしてトンドをしなくなったのか知りたいものである。

またトンドが日待講（伊勢講）の一環として存在するところもある。大和郡山市清水では、日待講の当屋の家に集まり、そこで一夜を明かして朝日を拝んでからトンドに行ったそうである。

（浦西 勉）



1月14日のトンドの準備（橿原市大久保）



トンドの火で餅を焼く（大淀町北六田）

大和まじない資料

(1)

以下に掲げる資料は、戦前奈良師範（現教育大）の学生が調査し、レポートとして提出したものを林宏氏が整理したものである。その資料は膨大な量に上るが、貴重な伝承も数多く含まれているので、今後の研究に資する意味から、以後機会あるごとに逐次紹介して行きたいと考えている。尚、地名は旧市町村名のまま表記した。

■着物に関するまじない■

☆着物を北向に干すと凶（樫本、初瀬、下市、中龍門）。

北を向いて着物を着ると凶（樫本、初瀬）。

☆裏向きに着物を着ると死人が出る（下市）。

死んだ時の白い着物は左前に着せる（法蓮）。

着物を左前に着ると死ぬ（伊那佐）。

☆着物を夜干すとその持主は弱くなる（東里）。

☆三つ身の着物は「出世着物」として誰でも一度は着用する（御杖）。

藤の模様の着物を着ると出世できぬ（伊那佐）。

着物や帯にしつけをしたまま着ると狐が悪く（法蓮）、狐に化かされる（伊那佐、飛鳥）、災難を蒙る（奈良）。

☆新調の着物を着る前には、その前に大黒柱に着せてからにする（東里）。

新調の着物を始めて着る前に、大黒柱にそれを着せて「主も千年、柱も千年、着物も千年」と三度唱えると長く着られる（白銀）。

☆着物にカマドのスミが着くと、睨んで拭かぬととれない（伊那佐）。

■裁縫に関するまじない■

☆糸巻の糸の端がわからぬ時は、糸巻を袂に入れて三度振る（黒瀧）。

☆もつれた糸をほどくには「虎の尾、虎の尾、虎の尾」と三唱する（奈良）。

「やしゃもしやや、もしゃしゃの中のやしゃもしやを、もしゃしゃなりけれ、やしゃもしやの神」と三度唱える（法隆寺）。

「もしゃしゃのしゃやもしやは、もしゃしゃなければしゃしゃもしゃもなし」と唱える（郡山）。

☆急ぎ物を裁つ時は「津の国の、さしきのえびす衣たちて、入り日も時もかわらざりけり」と唱える（宇智）。

☆着たまま着物を物指ではかると早死する。それを避けるには「ぬいだ」といってはかる（奈良）。

☆針が無くなると、死んでから針の山に連れて行かれる（伊那佐）。

☆背の縫い糸を切らずに続けて縫うと出世する（御杖）。

☆片袖だけつけたままで夜を越すと、幽霊が手を通しに来る（御杖、東里）。

☆片袖だけつけたままで放っておくと「幽霊の片袖」という（法蓮、伊那佐、新庄、下市、朝和）。

☆着物の仕立寸法三尺は凶（法蓮）。

☆妊婦が裁縫中に他の人に糸を通してもらって、その糸尻を結んでもらうと難産する（箸尾）。

☆七月七日（七夕の日）に針に糸を通すと裁縫が上手になる（東市、法隆寺）。

☆背縫の時三度つなぐと「身を切る」、即ち命が短くなる（朝和）。

☆帯を子供の着物にすると、子供の寿命が縮まる（朝和）。

■履物に関するまじない■

☆新しい履物（ゲタ、ゾウリ）を午後から（特に夕方）

おろすのは凶（郡山、中龍門、初瀬、福住、川東、東山、東里）。それでももしおろしたい時には次のまじないをすれば良い。炭をつけてはく（福住）、灰をつけてからにする（川東）、スで汚してからはく（東山）、カマドの炭を三べん裏に塗って「良いことあれ、悪いことあるな」といっておく（東里）。

新しいゾウリをはく場合は、それをクドの火付の所で「ええこと、ええこと」と言いつつ二、三回擦ってはく（曾爾）。

新しい物を使い始めるには夕方は凶（下北山）。

☆新しい下駄をおろす時は、台所の所で歩いておくとき長持ちする（伊那佐、奈良）、井戸端へはいて行く（陵西）、葬式の日にはけば永く保つ（福住）。

☆新しいゲタをおろす時、畳の上からはいたまま下りるのは葬式の時だけで凶（樫本、郡山、下市）。

新しいゲタは畳の上ではいてはならぬ（下市）。

☆朝ゲタが切れると凶（伊那佐）。

☆ゾウリのタウの引けない時は「親にはかせる」と唱えて三回腰を回して、また「親にはかせる」といって三回拝んで引く（三郷）。

☆ゲタのハマ（歯）の前の方がよけいに減れば親孝行で後の方が減れば親不孝という（真菅）。

■髪に関するまじない■

☆子供が散髪を好きになるには、坊さんのテッパツを頭の載せる（三輪）。

☆月代を好まない時には、雨水を新しい^{ほうらく}炮烙に入れて湯にわかし、その湯をつける（掖上）。

☆散髪する時縮まぬように、刈り取った毛髪を道路の中央に捨て、通行人に踏んでもらう（三本松）。

☆髪の毛が長くなるように、切った毛を川に流す(磐城、御所)、「鳥のように黒くなれ、川のように長くなれ」と唱えて川に流す(新庄)、刈り取った毛を道路の中央に捨て、人に踏んでもらう(東市、東里、丹波市、黒瀧)。

☆洗髪 七日盆の朝、日の出前に川で髪を洗うとよく落ちる(三輪、東市、織田、田原本、桜井、纏向、飛鳥、榛原、三本松、秋野、四郷、南生駒、葛、大阿太、白毫寺)、七夕の夕に髪を洗うと髪が綺麗になる(柳本)、盆の八時までに髪を洗うと良く落ちる(纏向)、髪の毛を洗った後、ワラで縛ると早く乾く(野原)。

☆髪を結うことが上手になるためには、流れ星を見た時その星が消えぬうちに髪をつかめば良い(帯解)。

☆髪の毛を燃やすと、その毛の主が気違いになる(標本、東山、川東、初瀬、下市、中龍門)。

カマドのそばで髪を梳くと気違いになる(伊那佐)。

☆宵庚申に髪をすくと凶(纏向)。

■爪に関するまじない■

☆夜爪を切ると親の死に目に会えぬ(伊那佐、富雄、箸尾、新庄、下市、中龍門、真菅)。

夜爪を切ると親に早く死別する(丹波市、真菅)。

夜爪を切る時は「何の爪、犬の爪、手の爪」と唱えながら切る(標本)。

午後爪を切ると凶(東里、福住)。

☆爪を火鉢に入れると(くべると)不幸あり(伊那佐)、気違いになる(箸尾、下市)。

火鉢のそばで爪を切ると家がとぶ(伊那佐)。

☆爪をつんで堅かったら親に不幸をし、軟らかであれば孝行をする(真菅)。

■食事に関するまじない■

☆御飯をこぼすと目がつぶれる(新庄)。

食物を粗末にすると食道がふさがる(伊那佐)。

☆食べながら歌をうたうと気違いになる(伊那佐)。

☆食べた箸を捨てると乞食になる(伊那佐)。

箸でつかみ合うとけんかする(伊那佐、東里)。

箸で茶碗を叩くと貧乏神が寄って来る(伊那佐)、貧乏になる(初瀬、川東)。

御飯に箸をつきさしてはいけない(初瀬、真菅)。

☆御飯を茶碗に盛る時は、真似でもいいから必ず二度つぐこと(真菅)。

一膳飯は凶(下市)

一ツ膳に塩と味噌を載せてはならぬ。死人に供える時だけ(福住)。

お椀で水を飲むと凶(初瀬)。

☆御飯を食べた後でノビをしてはいけない。腋の下に飯が入って死ぬ(新庄)。

御飯を食べてすぐ寝ると牛になる(各地)。

☆月の一日、十五日に食器が変わったらゲンが悪い(下市)。

庚申に味噌を食べると七代貧乏する(伊那佐)。

■台所にまつわるまじない■

☆御飯のできそこなった時は、酒を御飯の上にかく(富雄)。

おこげの香を消すには炭火を三つ入れてふたをしておく(平群)。

☆味噌の味が悪くなったなら、シャクナゲをさせば良い(中荘)。

☆味噌、醤油、漬物などの味が変われば、家内に病人か死人が出る(東山)。

☆ニンニク、ニラ等の悪臭を除くには紙をしがむ(宇智)。

臭気のはなはだしい時は、茶碗に水をくんでその上にソロバンを横に立てる(中荘)。

☆南瓜の半切りの腐敗を防ぐには、箸を一本切口にきしておく(標本)。

☆土瓶の口を北に向けると凶(三宅)。

☆井戸水のにごりを止めるには、太神楽の頭(獅子頭)の紙製の毛をとって井戸にはめる(見瀬)。

☆ソーメンをつくった紐を粗末にすると凶。必ず火の中へ捨てる(下北山)。

☆昆布を焼くと貧乏する(初瀬、箸尾、下市、真菅)。昆布を焼くと気違いになる(下市)。

夜昆布を食べると福が来る(伊那佐)。

☆ゴボウの四ツ切りは葬式だけ(標本、森本)。

■拾い物に関するまじない■

☆手拭いを拾えばゲンが悪い(下市)。

☆櫛を拾えば「苦を拾う」とて忌む(下市)。

櫛を拾う時は、足で踏んで拾わないと「くしくし」と思う(箸尾)。

☆扇を拾えばゲンが良い、「扇めでたや、末繁昌」と唱えて拾うと家が栄える(下市)。

注 旧東市村、東市村白毫寺、帯解町、富雄村、東里村、そして法蓮は現在奈良市に属します。以下初瀬町、三輪町、織田村、纏向村は桜井市に、標本町、朝和村、福住村、丹波市町、森本は天理市に、宇智村、野原町は五条市に、掖上村、葛村は御所市に、真菅村、見瀬は橿原市に、陵西村は大和高田市に、南生駒村は生駒市に、飛鳥村は明日香村に、法隆寺村は斑鳩町に、箸尾町は広陵町に、川東村は田原本町に、磐城村は当麻町に、伊那佐村は榛原町に、東山村は山添村に、三本松村は室生村に、中荘村、中龍門村は吉野町に、白銀村は西吉野村に、四郷村は東吉野村に、秋野村は下市町に現在属している。

(文責・松崎)

博物館事業報告（昭和49年11月～50年12月）— 開館一年の歩み —

▶はじめに

奈良県立民俗博物館も昨年11月で開館一周年を迎えその実績を足場により高くはばたこうとしている。

振り返ってみると、知事の提唱により昭和46年大和民俗公園基本構想を樹立、翌年4月大和民俗公園建設室を設置し、民俗資料収集の傍わら公園基本設計業務の着手、又当公園主要施設である民俗博物館の新築工事を48年11月より開始して、県下47ヶ市町村の絶大な協力と県民の高い文化意識に支えられ、7,400点あまりにのぼる貴重な民俗資料の拠出を基盤に、49年11月9日ここに全国にも初めての民俗専門の博物館として、発足した。

さて、当博物館を考える上に、わが奈良県「大和」は古代文化の発祥地で貴重な文化遺産を今日まで担ってきた庶民の蔭の力を忘れてはなりません。これらの人々の日常生活の中で生れ育ってきた生活文化財、すなわち民俗資料を後世に永く伝え県民の心の糧としていただくためにこれらの貴重な資料の収集保存と調査研究を行なうと共に、資料や研究成果の展示公開を行ないさらには教育普及活動を積極的に行なう重大なる使命を担って、職員一同常に仕事に対し研究的に互に力をあわせて、さらには展示その他普及活動に至るまで見学者、及び聴講者に充分納得していただけるよう配慮し親切をモットーとしてまいりました。多くの方々の指導や批判を今後充分とり入れて一層の努力を重ねてまいりたいと思っております。特にこれら文化財保存事業については、短期間にその効果をおよぼすものではなく、たゆまぬ努力が必要であり又当博物館と関連施設の充実により、すなわち古民家の復原と公園整備事業の進展に伴ない、これら三位一体となった大和民俗公園完成によって初めて博物館の力を発揮できるものと確信しますので、長い目で指導、御鞭撻いただきますよう満1年の記を述べるにあたりましてよろしく願います。

1 ◀民俗資料収集と調査▶

全国的にも例のない方法で、昭和46年以降3年間にわたり各市町村に2名の専門調査員を委嘱し、県下一斉に民俗資料総合調査を展開して県民の全面的な協力のもとに分類的にも大半収集することができ、昨年からは分類別に最も少ないものを主体に収集並びにその裏付調査を実施してまいりました（表1）。

今後年次計画に沿って収集資料の裏付追求調査整理が最大の課題である。

2 ◀展示について▶

当博物館は、常設展示を主体にわが奈良県を地域的に

民俗資料収集状況表

(表1)			(50.12末現在)		
区 分	46. 10 ～49. 10	49. 11 ～50. 12	区 分	46. 10 ～49. 10	49. 11 ～50. 12
衣	762点	78点	社 会 生 活	573点	30点
食	1,095	61	信 仰	139	321
住	947	37	民 俗 知 識	360	87
生産・生業	2,643	97	民 俗 芸 能	72	15
通信交通運輸	291	4	人 の 一 生	113	1
交 易	437	93	年中行事等	31	4
合 計			8,291点	7,463点	828点

三つに区分（国中、吉野山地、大和高原）しそれぞれの生業をテーマに、又一方庶民の日々の暮らしを中心に展示しております。特に生活基盤とか、わるその三地域の民家の形態相違を浮き彫りにした「大和の民家」と題し、オートスライドを作り民俗資料を理解する上で意義あるものといえます。又民俗資料展示の場合対象物が地味であるためとして単調になりやすいのでパネル等を充分活用して有機的に小学生でも充分理解していただける様工夫しております。又豊富な館藏品の中から適宜展示品を変えて、できる限り新鮮みをもたせるよう努力しています。

昨年10月10日から11月24日まで特別テーマ展「大和の葉と行商」を開催したところ、非常に好評であって富山売葉について大和売葉が盛んであった為、それだけ関心が深かった様です。11月26日からは、常設展を新たに「しごと・きもの・たべもの」というテーマで展示を行なっております。

3 ◀体験学習と民俗講座▶

民俗資料（有形）とは、当然日常生活の中で必要に迫られて手近かな資材をいろいろ工夫され自家用品として生れてきたものであり、その後改良を加えられ大量生産に転じたものも数多く、展示のみでは実際どのようにして作られ、又使用されたのかが理解しにくいものもある。当館では郷土学習室で毎月第4日曜日「体験学習講座」と銘打って、製作実習等を実施し見学者が自由に参加してもらって展示をより具体的に理解していただけるようしており、好評のうちにすでに15回実施し定着化しました。民俗講座も回を重ね、聴講者も増えつつあり、教育普及の一貫としてその効果を高めている。これらの催し物は、従来の博物館イメージにあるような物を見て帰るといったものではなく、できる限り県民参加の場として活用されるよう心掛けています。

～ 体 験 学 習 ～

49. 11	サンダワラあみ・縄ナイ	59名参加
49. 12	シメナワづくり	67名
50. 1	杓子づくり	107名
50. 2	ゾウリづくり	177名
50. 3	麻糸づくり	121名
ク	ムシロ織り	106名
50. 4	竹馬・竹トンボづくり	112名
50. 5	お手玉づくり	71名
50. 6	桶づくり	91名
50. 7	水テッポウづくり	114名
50. 8	手まりづくり	56名
50. 9	籠づくり	82名
50. 10	薬ができるまで	133名
ク	土臼ひき、トウミ選別	56名
50. 12	シメナワづくり	69名

～ 民 俗 講 座 ～

49. 12	大和のくらしと仕事	奈良教育大学 林 宏氏
50. 2	吉野の木地師	東大寺学園 岸田定雄氏
50. 3	家の神について	京都女子大学 高取正男氏
50. 4	人の一生～妻問い、嫁入り、そして～	大阪市立博物館 平山敏治郎氏
50. 6	大和の道しるべ	帝塚山短期大学 堀井甚一郎氏
50. 8	大和と柳田国男と	帝塚山短期大学 水木直箭氏
50. 10	日本の民家	奈良国立文化財研究所 鈴木嘉吉氏
50. 10	薬のあゆみ	大阪大学 宗田 一氏

4◀広報活動▶

博物館活動は館内での展示及び、研究、調査、保存といった業務のみに終らず、一人でも多く博物館を利用又はその内容を理解せしめるようPRする必要がある、えてして公共施設の場合は経済的にも事情があつてこの面については怠りがちであるが、今後博物館運営とも大きななか、わりの中で断片的ではあるが発表の場として大いに広報活動を推進していくべきである。

～ テ レ ビ

49. 11	「民俗博物館オープン」	奈良テレビ(テレビ県民室)
49. 11	「民俗博物館」	奈良テレビ(テレビ県民室)

49. 12	「シメナワづくり」	NHK(UHF)
50. 1	「シメナワづくり」	NHK子供ニュース
50. 8	「手まりづくり」	NHK(UHF)
50. 11	「民俗博物館開館1周年」	奈良テレビ(県政相談室)
50. 11	「薬ができるまで」	NHKニュース
50. 11	「大和の売薬」	NHK近畿の話題
50. 12	「手づくりの体験学習」	奈良テレビ
50. 12	「シメナワづくり」	NHK(UHF)ニュース
50. 12	真珠の小箱「しめなわ」	毎日テレビ

～ ラ ジ オ ～

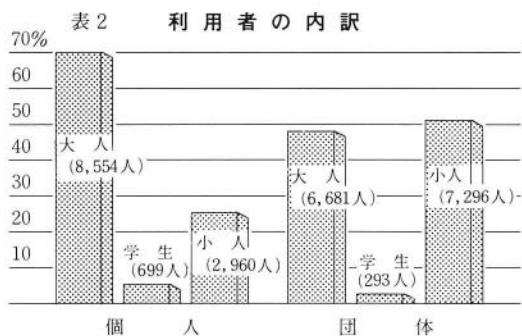
50. 1	「鍋屋町27」	NHK(奈良FM)
50. 3	「ごめんやす馬場章夫です」	毎日放送

～ 広 報 紙 ～

49. 11	期待される民俗博物館(奈良県観光)
49. 11	民俗博物館の落成(建設新報)
49. 12	民俗博物館オープン(県民だより)
50. 12	民俗博物館利用について(県民だより)

～ 印 刷 物 等 ～

大和の民俗展(図録)	2回
大和の薬と行商(図録)	1回
博物館利用の手引き	1回
大和の民俗Ⅰ(図録)	1回
催し物のおしらせ	5回
常設展示用ポスター	3回
特別テーマ展ポスター	1回
博物館だより	5回



月 別 入 館 者 数 一 覧 表

(昭和50年12月31日現在)

(表3)

年 月	49. 11	12	50. 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合 計
開館日数	18	23	23	24	26	26	27	25	27	27	26	25	25	23	345
合 計	1,712	1,219	1,211	1,261	2,938	1,682	3,409	2,543	1,374	1,386	1,341	3,449	2,494	437	26,456
個人入館数															
大人	990	574	416	385	747	743	828	1,050	408	481	460	588	713	171	8,554
学生	79	51	19	26	82	57	79	72	43	55	33	51	41	11	699
小人	258	186	141	248	388	357	271	218	106	289	130	135	182	51	2,960
団体入館数															
大人	256	250	389	125	391	349	747	1,103	466	334	638	588	960	85	6,681
学生				21	28	36	31	5				152	20		293
小人	129	158	246	457	1,302	140	1,453	95	350	227	80	1,935	578	119	7,269

～ 移動展示 ～

50. 10. 12～10. 18 特別テーマ展の紹介 東洋信託銀行
50. 11. 12～11. 21 民俗博物館の紹介 南都銀行本店

5◀日記抄▶

49. 11. 1 奈良県立民俗博物館条例施行
〃 民俗博物館職員発令 川内一郎館長外12名
49. 11. 9 民俗博物館落成式
49. 11. 10 民俗博物館の一般公開
50. 1. 12 近畿民俗学会見学
50. 2. 12 奈良地理学会見学
50. 3. 26 民俗専門委員会開催
50. 3. 29 東京私立中・高校地理教育研究会見学
50. 4. 1 人事異動 次長廣澤修、主事吉岡豊、
技師清水昌輝新任、主事柳本茂、
技師杉本英郎転出
50. 4. 2 国学院大学（博物館実習）
50. 4. 20 奈良県立考古博物館友史会見学
50. 5. 15 東京芸術大学見学
50. 5. 収蔵庫2段棚工事開始
50. 6. 18 兵庫県立近代美術館友美会見学
50. 8. 1 人事発令 技師松田敏行、技師今西良男兼務
50. 9. 24 中国北京芸術団見学
50. 10. 5 龍谷大学（博物館実習）
50. 10. 10 特別テーマ展「大和の薬と行商」開始
50. 10. 29 関西博物館連盟定例会見学
50. 10. 31 帝塚山学院大学（博物館実習）
50. 11. 5 奈良県家庭薬配置組合見学

6◀管理運営▶

～ 職員 ～

職名	氏名	職名	氏名
館長	川内 一郎	主事	吉岡 豊
(兼務) 次長	廣澤 修	(兼務) 保安員	奥 昇
(兼務) 総務係長	西久保俊輔	学芸係長	奥野 義雄
(兼務) 主事	和田 泰子	主事	芳井 敬郎
(兼務)			

主事	松崎 憲三	技師	川瀬 浩
〃	大宮 守人	(兼務) 倉窪 孝	
〃	浦西 勉	(兼務) 建造物係長	松田 敏行
施設係長	清水 昌輝	(兼務) 技師	今西 良男
(兼務)		(兼務)	

～ 民俗専門委員会 ～

水木直箭（帝塚山短期大学教授）、平山敏治郎（大阪市立博物館長）、堀井甚一郎（帝塚山短期大学教授）、林宏（奈良教育大学助教授）、岸田定雄（東大寺学園教諭）

～ 入館者数 ～

別表（2）

〃（3）

～ 昭和50年度予算 ～

（単位 千円）

民俗博物館運営費	84,723	(5) 収 集 費	300
(1) 職 員 費	27,130	(6) 委 員 会 費	82
(2) 管 理 費	48,417	(7) 広 報 費	996
(3) 展 示 費	2,961	(8) 備 品 費	1,097
(4) 研究調査費	1,515	(9) そ の 他	2,225

7◀公園等整備事業▶

初めにも申しましたが、当博物館は大和民俗公園の中にあって、その公園造りとは不可分の関係にあります。民家復原保存事業は長期展望にたつて遂行し、又公園整備も50年12月に都市公園事業として認可され、今後5ヶ年計画に基づいて民俗博物館にふさわしい環境作りの実現に努力している。

～ 民 家 ～

旧吉川家住宅 S.47. 4解体……51. 3 復原完了予定
旧臼井家住宅 49. 7解体……51. 11 〃
旧木村家住宅 49. 12解体
旧赤土家離座敷 50. 12解体

～ 公園整備 ～

別表（4）



公園整備事業

（表4）

	48. 49年度完成	50年度完成予定
公園完成面積	5.6ha	2.5ha
園路延長	700m	530m
便 所	1 棟	
池		1ヶ所 530㎡
植 栽		
高 木	660本	250本
低 木	19,700本	2,500本
芝 生	480㎡	2,500㎡

寄贈民俗資料分類目録 (昭和49年11月10日～昭和50年12月31日)

当博物館では、先に寄贈民俗資料分類目録を刊行致しましたが、昭和49年11月10日開館以降昭和50年12月末日に至る間、更に多くの方々より貴重な資料をご寄贈いただきました。資料点類にして 828 点、64 名の方々にご協力いただきました。ここにご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。

分類番号	調査番号	民俗資料名	数量	採集地	寄贈者氏名	備考
------	------	-------	----	-----	-------	----

■ 衣・食・住

【A】服 飾

A-A	604	頭巾	1	樫原市今井町	県立樫原考古博物館	
	605	〃	1	〃	〃	
	606	〃	1	〃	〃	
	663	〃	1	〃	〃	
	465	菅笠	1	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	708	帽子	4	吉野郡下市町阿知賀	南博治	
	763	帽子	1	高取町車木	永井甚太郎	
	466	てぬぐい	1	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	462	茶み衣裳	1	〃	〃	
	503	背広(麻)	1	奈良市中之庄	岡井亀之介	
	461	ハンチヤ	6	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	472	夏用仕事着(ハンチャ)	1	宇陀郡室生村下笠間	井上一治	
	458	ジユパン	6	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	460	パツチ	6	〃	〃	
	751	〃	1	北葛城郡河合町佐味田	堀内正俊	
	457	帯	2	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	549	手覆	1	樫原市今井町	県立樫原考古博物館	
	550	〃	1	〃	〃	
	459	〃	7	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	552	甲掛	1	樫原市今井町	県立樫原考古博物館	
	607	涎掛	1	〃	〃	
	551	脚絆	1	〃	〃	
	562	〃	1	〃	〃	
	608	すっぽん(腹当て)	1	〃	〃	
	464	刺子足袋	1	山辺郡都祁村白石	福井ゆき系	
	575	下駄	1	樫原市今井町	県立樫原考古博物館	
	468	サキハナオ(下駄の部品)	1	磯城郡川西町下永	安井晟	
	576	ツナヌキ	1	樫原市今井町	県立樫原考古博物館	
	577	朝鮮履	1	〃	〃	
	467	靴の部品	1	磯城郡川西町下永	安井晟	
	545	傘	1	樫原市今井町	県立樫原考古博物館	
	547	合羽	1	〃	〃	
	578	蓑(麻製)	1	〃	〃	
A-B	666	もとい	1	〃	〃	
	586	簪(かんざし)	1	〃	〃	
	587	〃	1	〃	〃	
	588	〃	1	〃	〃	
	589	笄(こうがい)	1	〃	〃	
	590	〃	1	〃	〃	
	591	櫛	1	〃	〃	
	592	〃	1	〃	〃	
	593	すきぐし	2	〃	〃	
	594	鏡	1	〃	〃	

	595			鏡		1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館		
	596			タ		1	タ	タ		
	597	鏡			台	1	タ	タ		
	598	く	し	も	の	1	タ	タ		
	599	お	し	ろ	い	1	タ	タ		
	601	紅		猪	口	1	タ	タ		
	709	五		倍	子	1	宇陀郡曾爾村葛	橋本重省		
A-C	564	き		ぬ	た	1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館		
	523	打			盤	1	吉野郡十津川村旭	関西電力		
[B] 食										
B-A	475	キ			ビ	1	吉野郡大塔村篠原	中平コマエ		
	476			タ		1	タ	タ		
	477	キ		ビ	(シロキビ)	1	タ	住谷ツヤ		
	478	シ	コ	ク	ビ	エ	1	和泉朝子		
	479			タ		1	タ	富田千代乃		
	480	ア		ワ	(男ダマシ)	1	タ	住谷シヤ、富田サワエ		
	743	ア			ワ	1	吉野郡上北山村西原	新谷利雄		
	481	ト	ウ	キ	ビ	1	吉野郡大塔村篠原	米沢コハル、住谷ツヤ		
	482	ブ	ン	ド	ウ	1	タ	岸本綾子		
	745	カ	シ	の	粉	1	吉野郡上北山村西原	新谷利雄		
	686	ト			チ	1	吉野郡十津川村上葛川	森下正美		
	742	ト	チ	の	実	1	吉野郡川上村柏木	辻久		
	744			タ		1	吉野郡上北山村西原	新谷利雄		
	748			タ		1	タ	浦東スワ		
	691			麦		1	吉野郡十津川村上葛川	森下正美		
	749	ソ			バ	1	吉野郡上北山村西原	浦東スワ		
B-C	519	カ		マ	(釜)	1	吉野郡十津川村旭	関西電力		
	532	石			鍋	1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館		
B-D	518	キ			ネ	1	吉野郡十津川村旭	関西電力		
B-E	746	カ	シ	タ	タ	キ	ツ	1	吉野郡上北山村西原	新谷利雄
B-G	622	銚				子	1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館	
	623	爛		銚		子	1	タ	タ	
	624			タ		1	タ	タ		
	455			盃		1	大和郡山市矢田町	西川ソノ		
	617			タ		1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館		
	619			タ		1	タ	タ		
	618	盃			台	1	タ	タ		
	620			タ		1	タ	タ		
	569	徳			利	1	タ	タ		
	570			タ		1	タ	タ		
	454			タ		1	大和郡山市矢田町	西川ソノ		
	455			盃		1	タ	タ		
	571	酒			樽	1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館		
	621	瓢			箆	1	タ	タ		
	629	長	き	せ	る	1	タ	タ		
	628	煙		草	入	1	タ	タ		
	665			タ		2	タ	タ		
B-H	687	カ	ン	コ	ロ	1	吉野郡十津川村上葛川	森下正美		
	688	ワ		リ	ナ	1	タ	タ		
	689	ゼ	ン	マ	イ	1	タ	タ		
	690	ワ		ラ	ビ	1	タ	タ		
B-I	497	キャベツ	(ツボシヤクシ製) 作工程途中のもの			1	吉野郡大塔村篠原	和泉安恭		
	498	ツ	ボ	シ	ヤ	ク	シ	3	タ	
	494	ジ	ヤ	ク	シ	1	磯城郡川西町吐田	清水鐸俊		
	496	飯	シ	ヤ	モ	ジ	3	吉野郡大塔村篠原	和泉安恭	
	495	飯	シャモジ	(製作工程 途中のもの)			4	タ	タ	
	534	飯			碗	1	梶原市今井町	県立梶原考古博物館		
	535	茶			碗	1	タ	タ		
	602	楊			枝	1	タ	タ		
	603			タ		1	タ	タ		

	537	弁	当	入	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
	538		々		1	々	々	
	539		々		1	々	々	
	667	弁	当箱(行李)		1	々	々	
【C】住居								
C-B	528	カ	マ	ド	1	山辺郡都祁村針ヶ別所	向順己	
C-C	626	野	風	呂	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
C-D	525	表		札	1	吉野郡十津川村旭	関西電力	
	488	キ	ヤ	ダ	1	大和郡山市矢田町	中尾次朗	
	679	う	ち	わ	3	不明	県立橿原考古博物館	
	568	火		舎	1	橿原市今井町	々	
	493	炭	カ	ゴ	1	磯城郡川西町吐田	清水鏞俊	
	474	松	の	ジ	1	吉野郡天川村塩野	松葉与平	
	636	手		燭	6	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
	581	手		炉	1	々	々	
	632		々		1	々	々	
	638	燭		台	1	々	々	
	637	行		燈	2	々	々	
	669		々		1	吉野郡大淀町増口	々	
	641	ぼ	ん	ぼ	1	橿原市今井町	々	
	600	油		壺	1	々	々	
	573	提		燈	1	々	々	
	572		々		1	々	々	
	574		々		1	々	々	
	668	竹	ラ	ン	ブ	1	吉野郡大淀町増口	々
	707	置	ラ	ン	ブ	1	大和郡山市矢田町	渡海谷俊雄
	640	か	ん	て	ら	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	696	ガ	ン	ド	ウ	1	大和郡山市岡町	小泉篤一
	540		々		1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
	630	燧		石	1	々	々	
	631	火	打	具(箱入)	1	々	々	
C-E	579			枕	1	々	々	
	580			々	1	々	々	
C-F	654			槌	1	々	々	

■ 生産生業

【D】農	耕												
	D-A	485	カ	ラ	ス	キ	1	大和郡山市柳町	奥	塚	金	三	
	D-B	486	除		草	機	5	大年郡山市矢田町	中	尾	次	朗	
	D-C	520	セ	ン	バ	コ	キ	1	吉野郡十津川村旭	関	西	電	力
		521			々			1	々		々		
		660	稲		扱	き	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館				
		661			々		1	々		々			
		671	ふ		る	い	1	不		明		々	
		675	唐			箕	1	橿原市今井町			々		
		677	竹			箕	1	々			々		
		706	木			白	1	吉野郡大淀町芦原	喜	多	康	夫	
		704	ト		ウ	ミ	1	奈良市佐紀町	村	田	友	次	郎
		705	扇		風	機	1	磯城郡田原本町八尾	森	島	真	一	
		754	千	本	ギ	ネ	5	吉野郡大淀町岩壺	中	西	源	治	郎
D-E	463	茶	つ	み	か	1	山辺郡都祁村白石	福	井	ゆ	き	系	
【E】山	樵						1						
	E-A	674	山	仕	事	覚	帳	1	不		明	県立橿原考古博物館	
	E-C	516	山				刀	1	吉野郡十津川村旭	関	西	電	力
		507	ノ	コ	ギ	リ	1	々		々			
		508			々		1	々		々			
		509			々		1	々		々			
		510			々		1	々		々			
		511			々		1	々		々			
		512			々		1	々		々			

	513	ヨ		キ	1	吉野郡十津川村旭	関西電力
	514	ハ	ツ	リ	1	〃	〃
	473	ソ	マ	ヨ	1	吉野郡天川村塩野	松葉与平
	517	木	皮	む	1	吉野郡十津川村旭	関西電力
	515	マ	エ	ビ	1	〃	〃
	544	木	挽	鋸	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	452	腰	カ	バ	1	吉野郡川上村大滝	中西完次
【F】漁	労						
F-C	536	魚		籠	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
【G】狩	猟						
G-B	633	大		縄	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	750		〃		1	北葛城郡河合町佐味田	堀内正俊
	634	煙	硝	入	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	635	た	ま	入	1	〃	〃
【H】養	蚕						
H-A	697	養	蚕	用	2	奈良市西大寺小坊町	鮫田喜久治
【I】畜	産						
I-A	682	牛	の	鞍	1	不	明
	584	牛	馬	の	1	橿原市今井町	〃
	585	牛	馬	の	1	〃	〃
【J】染	織						
J-A	499	セ	イ	マ	1	奈良市中之庄	岡井亀之介
J-B	655	綿	打	弓	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	656	綿	打	の	1	〃	〃
	657	綿	繰	ろ	1	〃	〃
	685	綿	打	の	1	生駒郡斑鳩町	福井啓二 寄託
	504	緋		糸	1	宇陀郡室生村下笠間	井上一治
	500	カ		セ	1	奈良市中之庄	岡井亀之介
	501	カ	セ	棒	1	山辺郡山添村北野	浦窪マスエ
	522	糸		棒	1	吉野郡十津川村旭	関西電力
	701		〃		2	大和郡山市石川町	村井康祐
	702	糸	カ	セ	1	〃	〃
	703	糸	繰	機	1	〃	〃
	658	棒		繰	2	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	699	生	絲	機	1	大和郡山市外川町	山野好隆
	659	糸	よ	り	3	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	700	糸		棒	2	大和郡山市外川町	山野好隆
	698	種	取	機	1	吉野郡下市町阿知賀	南博治
J-C	670	織	機	及	1	吉野郡大淀町西増	県立橿原考古博物館
	490	ト	リ	付	1	大和郡山市矢田町	中尾次朗
	489	経		台	1	〃	〃
	502	茶		巾	1	奈良市中之庄	岡井亀之介
	692	大	和	餅	1	大和高田市出町	高井保
	693	大	和	餅	1	〃	〃
【K】手工・製造							
K-A	680	横		槌	1	不	明
K-B	483	メ	シ	ジ	2	吉野郡大塔村篠原	和泉重三郎
	484	ツ	ボ	ジ	2	〃	〃
	672	豆	腐	製	1	不	明
	711	煎	薬	保	1	御所市御所	吉川信義
	712	両	手	切	1	〃	〃
	713	石		臼	1	〃	〃
	714	丸	粒	用	1	〃	森田寅夫
	715	ベ	ク	ラ	1	〃	〃
	716		イト	粉	2	〃	〃
	719	テ	ン	コ	1	高市郡明日香村野口	脇本文資
	720	カ	ッ	タ	1	〃	〃
	721	ネ	リ	バ	1	橿原市今井町	島岡義一
【L】諸	職						
L-B	764	ソ	ギ	屋	5	吉野郡天川村山西	梅山信夫

■【M】交通・運輸・通信

M-B	681	も	っ	こ	1	不	明	県立橿原考古博物館
	487	サ	ラ	カ	ゴ	1	大和郡山市矢田町	中尾次朗
	747	ト	チ	採	集	フ	ク	吉野郡上北山村西原
M-C	662	荷	車	の	輪	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館

■【N】交 易

N-B	563	銭	さ	し	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	612	金		囊	1	〃	〃
	613		〃		1	〃	〃
	664	巾		着	1	〃	〃
	614	財		布	1	〃	〃
	526	当	座	帳	21	吉野郡十津川村旭	関西電力
	757	ふうせん	(売薬用)		6	高取町車木	永井甚太郎
	758	箸	(売薬用)		1	〃	〃
	759	薬価計算書		1	〃	岡本又吉	
	760	配薬名簿		10	〃	〃	
761	大		袋	25	〃	〃	
N-C	718	みやげもの	(売薬用)	3	御所市御所	森田寅夫	
	717	コヨリ		1	〃	〃	
	560	額銀量	り	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
	561		秤	1	〃	〃	
	676	計		器	1	不	明
	673	一	斗	斛	3	〃	〃
	695-4	一	升	斛	1	大和郡山市西田中	井口カツエ、沢井マサ子
N-D	695-3	五	合	斛	1	〃	〃
	695-2	一	合	斛	1	〃	〃
	695-1	トボ	一	(斗棒)	1	〃	〃
	722	版		木	4	桜井市箸中	堀井甚一郎
	557		〃		1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	558		〃		1	〃	〃
	559		〃		1	〃	〃
	723	看		板	1	奈良市法蓮呉竹町	西川廉行
	565	御		礼	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	566		〃		1	〃	〃

■【O】社会生活

O-C	541	火	事	桶	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
	625	す	っ	ぼ	ん	1	〃	
	643	龍	吐	水	2	〃	〃	
O-D	542	十		手	1	〃	〃	
O-F	492	カ	シ	ワ	ン	2	吉野郡大淀町北六田	岸田文男
	533	大		平	腕	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	609	袂			紗	1	〃	〃
O-G	453	古	文	書	10	北葛城郡上牧町上牧	松井豊治郎	
	710	古文書	タンス、	古書一式	1	吉野郡大淀町芦原	喜多康夫	
	543	木		刀	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館	
	582	鉄		砲	1	〃	〃	
	583	砲		弾	1	〃	〃	
	683		旗		1	桜井市下	萩原清治郎	
	505	双	眼	鏡	1	〃	〃	
	506	札	装	用	剣	帯	装	具
	684	水			筒	1	〃	

■【P】信 仰

P-B	752	神	農	像	1	奈良市法蓮呉竹町	西川廉行	寄託
P-C	738	神	酒	口	2	吉野郡下市町下市	梅田正雄	
	739	瓶		子	2	〃	〃	

	740	器	2	吉野郡下市町下市	梅田正雄
	639	と う が い	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
P-D	525	祈 禱 礼	1	吉野郡十津川村旭	関西電力
	730	産 婦 守 り 石	1	奈良市法蓮呉竹町	西川廉行
	755	ミ ガ ワ リ ザ ル	5	奈良市西新屋町	中村慶治
	756	々	7	々	辻井武彦
P-E	725	絵 蘇 民 桴 来 馬 符	274	奈良市法蓮呉竹町	西川廉行
	727	蘇 民 将 桴 来 の 木 影	1	々	々
	728	蘇 民 将 来 の 木 影	2	々	々
	729	牛 頭 天 王 の 木 影	1	々	々
	731	土 鈴	3	々	々
	732	い ぬ	1	々	々
	733	奉 納 物 (手 足)	1	々	々
	735	金 精 大 明 神	8	々	々
	736	木 の 葉 ザ ル	1	々	々
P-E	726	ウ グ イ ス	1	々	々
	734	は と	2	々	々
P-G	644	錫 杖 の 頭	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	645	ほ ら が い	1	々	々
	491	森山講行者御本尊一式	1	桜井市慈恩寺	森山講(代表酒井秀雄)
	527	氏 神 嘉 造 宮 覚 帳	1	吉野郡十津川村旭	関西電力
P-I	627	鉄 鉢	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館

■【Q】民俗知識

Q-A	554	習 字 手 本	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	553-A	文 箱 一	1	々	々
	553-B	硯 箱 一	1	々	々
	555	封 箱	1	々	々
	610	矢 立	1	々	々
Q-C	724	書 籍 (和綴本医学書)	72	奈良市法蓮呉竹町	西川廉行
	753	書 籍 (和綴本医学書)	4	々	寄託
	762	ク レ ズ ー ル 丸	1	高市郡高取町車木	永井甚太郎
	611	印 籠	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	642	の み と り	1	々	々
	678	は え た た き	1	不 明	々
Q-E	556	巻 曆	1	橿原市今井町	々
	567	自 鳴 鐘	1	々	々

■【R】民俗芸能・娯楽・遊戯

R-C	529	月 琴	1	橿原市今井町	県立橿原考古博物館
	530	提 琴	1	々	々
	531	太 鼓	1	々	々
	646	相 模 太 鼓	1	々	々
R-H	647	人 形	1	々	々
	648	て ま り	1	々	々
	649	知 恵 の 輪	1	々	々
	650	銭 打 の 玉	1	々	々
	651	貝 合 せ の 貝	1	々	々
	652	々	1	々	々
	653	々	1	々	々
	737	は り こ の 鹿	4	奈良市法蓮呉竹町	西川廉行

■【S】人の一生

S-F	456	か さ ぶ く ろ	1	磯城郡川西町保田	吉田忠一
-----	-----	-----------	---	----------	------

■【T】年中行事

T-A	469	フ ク ダ ワ ラ	1	山辺郡山添村三ヶ谷	馬場善之輔
	470	々	1	山辺郡山添村勝原	中谷戸鄰平
	471	シ メ ナ ワ	1	宇陀郡曾爾村伊賀見	坂井肇他
	694	筒 粥、水溜 祭 占	1	大和郡山市矢田町	矢田坐久志王比古神社

大和の民家

— プロローグ —

■はじめに

民家は、周囲の環境（自然環境）及びそこに住む人々の生活環境（社会環境）と共に生き続けるものであり、それぞれの環境にフィットした形態を備えている。大和地方に限ってみても、奈良盆地と盆地周辺、山地とではそこに住む人々の生活習俗にも微妙な相違が窮え、また民家の形も異なる。次号より、そうした相違に留意しつつ『大和の民家』と題して「町家」「^{モリナカ}国中の農家」（※国中とは奈良盆地の別称）「山家」と各地域の民家を順に辿って行きたいと考えている。このシリーズでは民家の形態がその中心テーマとなるが、そのみに留まらず「建築儀礼」についても触れ、更には「家の神」「家にまつわる習俗」についても言及し、民家と生活習俗の係わりについても考えて見たいと思う。

今回は、そうした各論に入るに当たって、先ず大和の民家の概要を述べてみることにしよう。

■集落と町並み

民家は建物そのものより、建造物群としての美しさの方が、より一層我々に感銘を与える。

国中でみられる条里制で構成された集落景観は、文化の連続性を、また歴史的景観の美しさをも感じさせる。集落は、その隅に鎮守の森を残し、狭い道路をはさんで戸々の建物が、整然と立ち並んでいる。また、周囲を水面でかこんだ環状集落もみられる。集落内の各家の建物配置は、南向に主屋を、その前方又は後方に付属屋を配し、干し場を囲み、そこを農作業の場として利用している。まさに、生活の場と仕事の場を一体化した機能的な構成で、閉鎖型建物配置とよばれるものである。多くの付属屋と主屋によって矩形の敷地をとりかこむ建物配置は、換金作物の栽培によって経済力を高めた江戸時代中期以降に成立し、一般化したもので、この地方の特色である。

国中の集落として、特異な形態をみせる集落がある。



町並み（橿原市今井町）

奈良市の北部に位置する法蓮町一帯に、法蓮造りと称する大和棟の民家が、道路と干し場をへだてて建ちならんでいる。多くの民家は、明治時代以後に大和棟として改造されたようであり、集落の形態は、古くから街村形態をとり、屋敷区画が奥行に細長く、町並の形態を示し、情緒あふれた景観を構成している。

また、文化・経済の先進地域である大和には、都市史を考えるうえに重要な古い町並みが多数残っている。門前町として発達した奈良市、城下町である大郡山市、寺内町である橿原市今井町、そして商業都市として発達した五条新町が、今なお、それぞれの町並としての機能を失わずして脈々と息づいている。

町を構成する民家の大部分は、棟割長屋住居であり、建物が連続し、住居としては独立性を有する。棟割長屋住居は、公共施設的性格をもつせまい道と共に住む人々を人間味豊かに育成し、町並景観にとって重要な構成要素となっている。また、ところどころにみる大きな建物（豪商の民家、寺院等）は、棟割長屋住居とせまい道によって生み出す連続性をやぶり、アクセントを付与し、町並景観のエレメントとして重要である。

このような古い町並みも、町づくりの手法探究及び都市史の研究には貴重な存在である。しかし、住環境としては悪く、火災・天災に対する不安、衛生設備の充実等の諸問題が、そこに住む人々の生活に大きくのしかかっている。

■屋根

民家の屋根型には、切妻造・入母屋造・寄棟造等いろいろなかたちがあり、材料も瓦、茅、杉皮、割板等からなる。

大和の民家の屋根型で代表的なものは、大和棟と呼ばれる切妻造と入母屋造である。大和棟の特色は、急な勾配の草葺屋根の両切妻を壁上で塗り固め、その上に瓦葺きにした高塀をあげ、前後に瓦葺きの庇をつけている。



法蓮造り（奈良市法蓮町）

そして、「カマヤ」部分に一段低い瓦葺きの落棟が接続している。上層階級の家では、他の妻側にも落棟が設けられ、奥座敷が接続している。大和棟は、高塀と草葺屋根の高さ関係及び棟飾りより、3つの形式に分類できる。高塀が草葺屋根よりも低いものを「ヒズミタカヘ」といい、同じか又は高いものを「タカヘ」という。また、草葺屋根の棟飾りが杉皮針目覆でなく、瓦葺箱棟となっているものもある。このような大和棟は、庄屋及び地主の家に家格表現形式としてとり入れられ、江戸時代にはひとつの集落に2〜3棟しかなく、その他の一般農家は単なる切妻造又は入母屋造であった。

大和棟の成立時期は、これまでの各関係機関の民家調査によると、18世紀末期と推定できる。19世紀前期にはすでに整備された大和棟の民家がみられるが、17世紀にさかのぼる民家で建設当初から大和棟である民家は、現在のところ例がなく、ただ大和棟とよく似た民家が残っているにすぎない。

大和棟の分布地域は、天理・田原本を中心に国中全域にわたっている。北は南山城、南は紀ノ川流域、東は伊賀上野、西は大和川流域に沿って河内平野におよんでいる。大和棟は相当広範囲に分布しているが、分布縁部では変型大和棟が多くみられる。

大和棟と同じく代表的な屋根型である入母屋造は、奈良盆地周辺の山間部に多くみられ、この地域は入母屋造を主として、片入母屋、片入母屋大和棟といった複合型の民家がある。また東山中には瓦葺きの庇をつけずに、草葺屋根をそのまま葺き下した民家もみられる。さらに、吉野の山深い山村では、杉皮葺き及び板葺きの勾配のゆるい屋根に石をのせた切妻造の民家もある。

■平面構造

大和の民家の間取りは、四間取りが一般的である。四間取りは、全国の農家に広く採用された間取りで、完成された基本型である。それゆえ、庶民の生活史を考えると、最も重要な間取りといえる。全国的にみて、四間取民家が成立したのは、江戸時代中期以後とされているが、民家発展の先進地域である大和・河内では、江戸

時代初期に、上層農民の家に成立していた。

四間取りは、整型四間取りと喰違^{はり}四間取りに分類され、喰違四間取りには、梁方向に喰違う民家と桁行方向に喰違う民家がある。大和においては、前者は国中に、後者は奈良盆地周辺の山間部にみられる。また、国中と山間の喰違四間取りは、正面土間側の部屋の広さにおいても相異が生じ、この両者の発展系統は異なると考えられる。山間部の四間取りに先行する間取りは、表に広い「ざしき」を設けその後方に「だいどころ」「なんど」を設ける前座敷三間取りの民家であると考えられる。この間取りの民家は、国中周辺の山間部・紀ノ川流域・西吉野さらに大阪南部に分布しており、表の「ざしき」を2部屋にすることによって、四間取りとなるのがわかる。国中における四間取りに先行する間取りについては、現在のところ資料不足のため述べることができない。ただ、国中と山間部の四間取りへの発展過程は別々で、四間取りが成立した時点で、両者の融合があったと考えられる。

18世紀後半から四間取りの民家は、五間取り、六間取りの民家へと発展する。これは、座敷まわりの整備にともない桁行にのぼした結果と推定でき、このように成立した五〜六間取りの大型住居とちがって、古い時期から五〜六間取りの民家が、国中を中心にみられる。この民家は、17世紀の建設とみられる大型住居で、土間沿いに2〜3部屋が2列に並んでいる。これらの大型住居は、一般に土間部分が広く、町家であっても農家平面と差がない民家である。この種の民家は、18世紀後期まで建設されていたが、19世紀に建設された民家ではあまりみられなくなる。

また、吉野の山深い山村では、山地地形の影響のため梁間のせまい間取りとなっている。正面には比較的広い縁を設け、2〜3部屋の並列型となっている。土間部分もせまく、表側の部屋幅に比べ後側の部屋幅もせまくなる山家特有の間取りがみられる。

■結 び

大和は民家の先進地域であると共に、近世の住居遺構も数多く残っている。日本の住居史を考えるには、地方毎に異なる住居発展の系統を明確に把握しなければならない。その意味でも、大和に残る先進的な民家の研究は重要なポイントとなっている。

現在、大和には重要文化財17件30棟、県指定文化財10件15棟あり、これらの文化財指定をうけた民家は、昭和36年に行なわれた今井町西家住宅の解体修理を最初に、年々修理されている。現在、今井町で豊田家住宅の解体修理が、また当公園においても重要文化財旧臼井家住宅、旧吉川家住宅の復原工事が進められている。さらに、町並み保存については、五条市より奈良国立文化財研究所が依頼を受け、五条新町の町並みについて基礎的調査が行なわれている。これらの調査・研究によって、保存対策も点から面へと拡大し、住みよい町づくりの手法がみいだされるに違いない。

(今西良男)



大和棟（奈良市柏木町）

藁 の 利 用

— 収蔵資料の紹介 —

(6)

木、竹、そして藁はかつての生活用具の原材料として最も多く使用されたものであり、そのほとんどが三者に依る製品であったと言っても良い。なかでも藁は、我々の主業たる稲作の副産物として得られるものであり、入手がたやすく、しかも細工が容易なことから用途が広く、ありとあらゆる方面に使用されてきたといえる。燃料、肥料、飼料として用いられる他、縄、綱等の結束用具、ムシロ、コモ等の被覆用具、モッコ、フゴ、オйнаワ等の運搬具、またミノ、ハバキ、ワラジやメシフゴ、鍋ツカミ等の食食用具、更にはシメナワ、カンジョウナワ、ノガミの蛇といった信仰用具と、その利用法については枚挙に暇がない。

今回は、そうした藁の多様な利用法のうち、あまり細工を要さぬものについていくつか紹介してみたいと思う。

藁には稲藁の他、コムギワラ、ムギ（ハダカムギ）ワラがあった。コムギワラは、屋根材として多く用いられた。大和棟でも、昭和10年代までは10軒に1軒位が瓦葺きで、他は、ほとんど藁葺きであった（安堵村）。平担にはカヤが無く、また稲藁だと軟らかく腐りやすいので、屋根用にコムギワラが使われた。コムギは屋根用の藁を確保し、またダンゴ用の粉を得る為に田の一部に植え、ワラはツシに保存しておいた。しかし時代が下ると屋根の補修（サシガエ）に稲藁も用いられるようになった。一方ムギワラは、肥料として使われる他、薪炭の補給用に燃料として使用された。

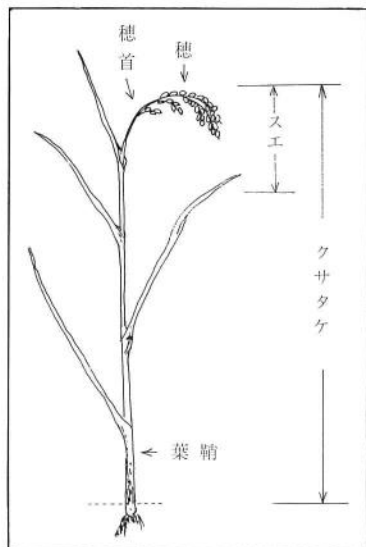
稲藁にもモチ藁と稈の藁があり、前者は軟らかくしかも粘り気があって細工しやすいとの理由から、最も多く

利用された。一般には稲は3、4個節があり、葉は節から茎を包むように伸びている。これを葉鞘という。一番上の節から穂先までをスエというが、スエは利用価値が高く、スエミノ、ドタオコシ用のスエ前掛（コシミノ）、ホウキ等に用いられた。このスエを抜くことをスエヌキといい、藁10本ほどを束ねて持ち、スエの部分を手にかからせて引っ張って抜いた。大層力が入ったという。稲の丈はクサタケといい、晩稲、中稲、早稲の順に低くなる。勿論長い方が使いやすいのであるが、長いほど葉鞘に水を含みやすく、雨と風にあおられると倒れて腐食し、使いものにならなくなる危険も多かった。

1. 肥料として

ススキにせずには田圃に配り放っておき、翌春オシギリで、3、4つに切って散りばめてから耕起する。こうしておくとも田植時分には半腐りになっていた（稲株も肥料となる）。堆肥を作るにも藁を使う。カリクサと藁を積んでその上に土を載せるという具合に人の背丈ほどに層状に積み上げる。土を入れるのはカリクサや藁が風に飛ばされぬ為でもあり、土を重しにすることによって始めて堆肥となり得るからである。使うまでには半腐りのものを鍬で切り崩し、もう一度積み替えて完全な堆肥にする。堆肥を田に置く時は粃殻と灰を混ぜる。粃殻や灰はそれぞれ納屋の一角に粃殻部屋、灰部屋が設けられ、そこに貯蔵されていたものである。また、郡山や奈良には灰の寄せ屋があり、毎年こちらの必要な分は彼等が持って来てくれた（安堵村）。

粃殻をくすべたものをクンタンといったが、これも肥



イネの部分名。



スエミノ



スエ前掛



牛のクシ

料として用いられた。秋の臼ひきの後、田にレンガを2つ置いてその上にブリキ製の煙突を置き、藁か紙を燃して少しずつ稲殻をかぶせて行く。燃えないように気を配りながら何回も繰り返し稲殻を次ぎ足して行きこがす。それを袋等に保存しておき、春苗代に稲蒔きをして、少し芽が出た頃その上にかぶせる（大和郡山市等平坦部）。

2. 飼料として

牛馬の床藁（敷藁）として用いられた藁は堆肥に積み替えるか、麦を起こす際に用いる。この床藁は10日か半月に一度は仕替える。長い間仕替えずにおくと牛は自分の糞にまみれてきたなくなる。こんな牛をクソ牛と言った。クソ牛をきれいにするには、鉄のブラシ（牛のクシ）を用いてこすって落としてやった。飼料に使う藁は質の良いものを選び、切り藁にして熱いシロミズ（米のとぎ汁）をかけて揉み、米ヌカを混ぜて与えた。牛を使う時分には、更に煮いた麦を混ぜた。生だとすぐ腹をこわしてしまうからである。安堵村では牛を飼っている人もいたが、山添村や都祁村等の山地から一ヶ月ほど牛を借りて田を耕やすことが多かった（借り牛という）。山地では木材の伐り出しに牛は欠かせぬものとして飼われ、また田植も平坦より一ヶ月ほど早かった為に、こうした制度も存在し得たのである。逆に平坦から山地に牛を貸すことを預け牛という。

ともに平坦を主体とした呼び方であるが、この借り牛と預け牛なる制度は、対山地との関係による地域的相違なのか、あるいは時代による逆転現象なのか、それは今後の調査を待たなければならない。

3. ミツナワナイキ

昭和の初期まで、雨の日はいつも縄緋いをした。この頃、スエナワキ（形不明）が出廻り、よけい縄を作った家ではスエナワ屋に売った。スエナワ屋は秋になると各戸を廻り、藁を買い取ったり縄を買って問屋に売り渡した。このスエナワ屋は終戦までは存在した。

普通縄は二つ緋いであるが、このスエナワを三スジ寄せ集めると4、5倍もの強さになった。この時使ったのがミツナワナイキである。このミツナワナイキは3人の手を要した。一人が写真左の踏み台に乗るか片足をかけて把手を回転させてスエナワを三つ緋いにしていく。そして一人がミスジに刻み込まれたシンコロクロを持ってミツナワが出来て行くに従がい、それを右の方へと移動

させて行く。もう一人は3本の縄を結びつけた用具の把手を持って回転させ、それぞれの二つ緋いを固くねじって行く。縄がよじれて来ると縄の長さが短くなる訳であり、三つ縄の緋手は少しずつ前へ前へと進まなければならない。だからこの役は身の軽い子供がすることが多かった。移動しやすいように、この踏み台の前の部分に一對の小さな車（木製）をつけたミツナワナイキもある。ミツナワはフゴやモッコの吊り縄、あるいは大八車の荷造用の縄として使われた。後者をテンナワと言った（安堵村）。

4. フクマルトンドの鹿

フクマルムカエは大晦日の夕刻乃至は元旦の早朝に行なわれる行事であり、伊賀から東山中にかけての地域及び奈良盆地周辺部に分布する。この鹿は川西町吐田のフクマルトンドに際して用いられるものであり、竹を芯に縄を巻きつけただけのもので、残念ながら尻尾は破損している。

吐田では昭和10年頃まで、大晦日の晩にトンドが行なわれていた。暮の大掃除の残骸とシバを集め、某家の厩己の方向にある門外の三又路でトンドをした。夕刻からムラ人が集まり、その頃を見計らってシバに火をともし、某家の当主もしくは作男が、ムラ人の「福コイ、福コイ」と囃す中を、この鹿を抱えてトンドの周りを三べん廻った。鹿は縄を巻き直すなど補修し、大晦日の朝からニワの横の部屋にシメナワを張って飾り置かれたもので、トンドの時はここから持ち運び、済むと再びここに戻しておく。シメノウチはこうして鹿を飾っておいた。

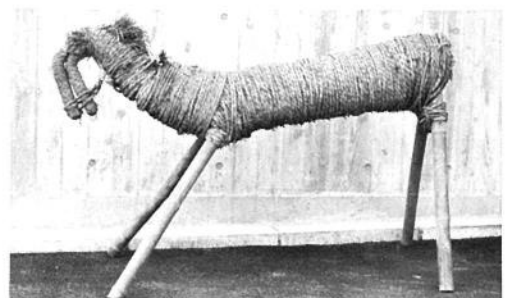
この鹿についてはこんな言い伝えが残っている。さる時どこからともなく鹿が訪れて来、トンドの周りを三度廻って帰った。そしてその年は大豊作になったので、そのゲンを祝って鹿を作り、トンドの周りを廻すようにしたのだという。春日信仰の影響を多分に受けているものと思われるが、フクマルムカエの際の訪れ者を、単に福神、あるいは犬としている地域が多い中において、鹿だとするのはこの吐田のそれが唯一の例である。

尚、本稿の執筆に当たっては、安堵村の辻本忠夫氏より多々ご教示賜わったことを記しておく。

（松崎憲三）



ミツナワナイキ



フクマルトンドの鹿

体験学習講座と民俗講座

★体験学習講座

10月の体験学習講座は、特別テーマ展「大和の薬と行商」に合わせて「薬ができるまで」を、11月には「土白ひき、トウミ選別」そして12月は恒例の「シメナワつくり」を行ないました。「土白ひき・トウミ選別」は、米の収穫期とからませ、カナゴキによる稲扱きからカラサオガチ、土白ひき、トウミ選別に至る一連の作業を、当初は10月と11月の2回に分けて行なう予定でしたが、都合上合わせて一度にした為、若干散漫なものとなってしまったことは否めません。しかし、それぞれの作業を一連のものとして体験していただくことにより、かつての稲作に対して、従来^{あいは}の理解とは違った形で把握していただいたのではないかと思います。「シメナワつくり」は、正月気分の高揚と相俟って大層の人気でした。薬細工は、常に参加者を魅了させるようです。

★民俗講座・特別講座

10月12日は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

長の鈴木嘉吉氏に「日本の民家」と題する講演を、また10月19日には特展に伴う講演「薬のあゆみ」を大阪大学の宗田一氏にお願いしました。前者では行政側の復原保存への姿勢を問う質問が出され、後者では大和売薬や漢方薬の今後の見通しを聞く方もおり、聴講者にとっては身近なテーマであり、切実な問題でもあるだけに、発言もなかなか活発でした。



◀「薬ができるまで」



◀「土白ひき・トウミ選別」

★★★★ お し ら せ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

- 1月25日 体験学習講座〈フゴづくり〉
- 2月8日 体験学習講座〈ミノづくり〉
- 2月22日 体験学習講座〈流しヒナづくり〉
- 3月28日 体験学習講座〈箸づくり〉
- 4月11日 民俗講座〈大和の伝説と昔話〉
- 4月25日 体験学習講座〈タビづくり〉

※体験学習講座は、午前11時と午後2時の2回、それぞれ1時間あまり行ないます。民俗講座は2階の講義室で午後2時より行ないます。

※都合により内容など一部変更することがあります。

●常設展について

昭和50年度下半期の常設展は、第一回の特別展「大和の薬と行商」終了後11月26日から「しごと・きもの・たべもの」というテーマで開催した。昭和51年度も「しごと」の各コーナー（稲作・山の仕事・大和茶）を本幹とし、最終コーナーで灯火・防火、調度品などに関する民俗資料をまとめた形で展示し、従前の「日々の暮らし」コーナーの充実をはかる。

仕事や日常生活の中でつくりだされてきた民俗資料を「日々の暮らし」コーナーでより一層深い理解へと導くために常設展示を順次交替させていく。

次回常設展は3月30日から10月7日まで催します。内容は仕事・暮らしの中の灯火と防火について展示する予定です。

●利用案内

- 観覧時間 午前9時～午後5時まで
但し入館は午後4時30分まで
- 休館日 毎週月曜日（その日が祝祭日の場合は翌日）と年末年始。
- 観覧料 大人 100円・学生70円・小人50円。
20名以上団体割引
- 交通機関 近鉄郡山駅より奈良交通バスの矢田山町、泉原町、矢田寺ゆきにて「矢田東山」下車。国鉄関西本線郡山駅下車、バスセンターまで徒歩10分、奈良交通バス「矢田東山」下車。

■編集後記■

博物館の対面に小さな丘があり、その背後には矢田丘陵が連なっている。この丘は、春や秋には博物館を訪れた人々の恰好の憩いの場ともなって大層賑わっていたが、今は、ポプラの木々が精一杯エキゾチックな雰囲気を醸し出しても、冬鳥が慰みに訪れるだけである。博物館とこの丘に挟まれた窪地では、民家移築の工事が目下急ピッチに進められている。再びこの丘が賑わい、民家が彩りを添える日も近い。（尾瀬河骨）